



シニアの青春



ゴルフア—

春日信彦

フロント9

伊都タクシーの松山社長（59歳）と植木経理部長（53歳）は、明日のゴルフのことで頭がいっぱいだ。月に一度、山本親子とゴルフを楽しんでいた。山本志保（46歳）は、離婚後、伊都タクシーに勤務するようになった。もう、かれこれタクシーを流し始めて1年半ほどになる。娘のリンダはF体育大学1回生でゴルフ部に所属している。志保はゴルフ好きの社長にリンダが日本女子アマで準優勝したと話したところ、ゴルフ好きの社長は、さっそく親子をゴルフに誘った。そのゴルフがきっかけで親子は社長に気に入られ、社長のほうから親子をゴルフに誘うようになった。

リンダは、子供のころから、ゴルフ好きの両親に連れられて練習場でレッスンを受けていた。いやいやながら打っていたが、10歳のころからドライバーが飛ぶようになり、次第にゴルフが好きになった。ジュニアで九州ナンバーワンになると、プロを目指してゴルフ部のあるF体育大学に進学した。ハーフのリンダは、174センチのがっちりした体格で、太ももの筋肉は男性並みの強靱さで、高速の左腰の切り上げは、プロ並みであった。

リンダも社長たちと一緒にゴルフをするのは、楽しかった。と言うより、母親のために接待ゴルフをやっていた。リンダのお尻は大きく盛り上がっていて、ミニスカートを穿いてアドレスをするとお尻が半分ほど見えていた。社長たちは、最初は見ないふりをしていたが、次第にリンダのはちきれそうなピチピチの肌に魅入られて、リンダのアドレスを凝視するようになってしまった。

さらに、社長たちの目の前で腰を下ろしてパッティングラインを読むとき、社長たちの目にリンダの色白の股間が飛び込んでくるのだった。社長たちは、やはり最初は、目をそらしたが、いつの間にか、リンダの股間に釘付けにさせられていた。リンダは、ラウンドを重ねるたび、ますます、サービスするようになった。ゴルフのおかげで母親の給料がうなぎのぼりによくなったからだ。社長は、リンダとのゴルフを始めてから、母親にお客をより多く回すように配車係に命じていた。

社長室に呼ばれた植木部長は、社長のいつもの興奮した口調に相槌を打っていた。社長は、伊都ゴルフクラブのメンバーで、毎週ゴルフを楽しんでいた。「社長、調子はどうですか？」社長の前に腰掛けていた植木部長は、この夏社長が新しく買い換えた本間のTW7 1 7 Pアイアンのことを尋ねた。社長は、笑顔を作り答えた。「すごいぞ、このヴィザードシャフト、7番アイアンで170ヤードは飛ぶ。こんなアイアンがあるとはな〜」社長は、アイアンのヘッドを磨きながらにんまりした。

目を大きく見開いた部長は、驚嘆の声を上げた。「そんなに飛びますか。魔法のアイアンですね。さすが、本間ですね。いい買い物をされましたね」植木部長は、ヴィザードのシャフトをじっと見つめていた。社長は、もの欲しそうに見つめている部長にひとこと言った。「君も、本間にしてみてもどうか？」顔を引きつらせた部長は、右手を顔の前でひらひらと振ると、恐縮した顔つきになり答えた。「いや、そんな高級なクラブは、私のようなヘボにはもったいないです。社長が下さったクラブでも、もったいないくらいです」

部長は、社長が10年前に使っていたタイトリストのクラブセットを一万円で譲り受けていた。部長は、ゴルフは苦手で、社長にやむなく誘われていた。部長は、コースに出て5年にもなるが、いまだ100が切れないでいる。「社長、明日は、ベストスコアが出そうですね」社長は浅黒い顔に自信に溢れた笑顔を見せた。「でもな～、リンダの股間を見てしまうと、興奮しすぎて、ダフッてしまう」にやけた顔の社長の頭の中には、リンダのはりのある色白の内腿が浮かんでいた。

同じくにやけた部長は、軽やかな声で心にもないことを話し始めた。「社長、最近、ゴルフが楽しくなってきました。社長にゴルフを教えてもらって感謝しています。明日のゴルフが楽しみです。明日こそは、100を切ります。見ていてください」社長は、部長の下心を見抜いていた。「そうか、楽しくなってきたか。俺のおかげじゃなく、リンダのおかげじゃないか」部長は、心を見透かされ、顔を真っ赤にした。

急に立ち上がった社長は、クラブをキャディバッグに入れると、腕時計をちらっと見た。「まだ、2時だ。もう少し、アイアンを打ち込まないと。部長、ちょっと付き合ってくれ」社長は、部長にアコーディアに行く準備を指示すると、社長の愛車、ブルーのポルシェボクスターに二人は乗り込んだ。アコーディアに到着すると、一階のいつもの29番に向かった。社長は、7番アイアンで160ヤードのピンを狙って、軽くボールを打った。「社長、いい感じですね。グリーンをとらえていますよ」

社長は、ドヤ顔で部長に答えた。「球はよくつかまるし、ボールも高く上がる。これだったら、75が出るかもしれないぞ。植木」社長は、ボールをマットの上に置くとまた打ち始めた。リンダとラウンドするようになって、時々OBするようになっていた。リンダの股間が目には浮かぶと、興奮しすぎて、力んでしまうのだった。椅子に腰掛けた部長は、じっと社長のスイングを後ろから見つめていたが、リンダの股間の奥にちらっと見える赤いショーツを思い出していた。

翌日、8時30分スタートの山本親子と社長と部長は、341ヤード、パー4の1番ホール
のティーグラウンドに集合した。社長がオナーに決まると、さっそく右手でティーアップした。
三人が打ち終わると、最後にグリーンとピンクのチェックのミニスカートを穿いたリンダがアドレスに入った。お尻を突き出すといつものように色白のお尻が半分露出した。大きくテークバックし、トップに来た瞬間ダウンスイングに入った。一気に振りぬかれたドライバーは、オレンジのボールを280ヤード先まで飛ばした。

社長と部長は、感嘆の声とともに拍手を送った。ダイナミックな腰の切り上げでひらりと舞い上がったスカートの中からピンクのショーツが一瞬現れた。ショーツの残像に呆然と立ちすくむ社長と部長を母親の志保はいつものように微笑みながら後ろからそっと眺めていた。四人を乗せたカートは、約200ヤード地点に志保を運んだ。リンダと社長はPWでパーオン。志保と部長がスリーオン。一番遠い社長からパットを始めた。ワンピンに載せたリンダが、パッティングラインを読むために何度も腰を下ろした。

リンダのラインはほとんどまっすぐで、バーディーは确实であったが、社長と部長の視線に入るように何度も腰を下ろし、ほんの少し股を開いては股間を見せた。社長と部長は、リンダが二人の前で腰を下ろすと、無意識にかがみ込み、じっと股間を覗きこんだ。リンダは、よだれを垂らしたハイエナのような二人の顔を横目で覗くと、いとも簡単に2ヤードのバーディーパットをカップインさせた。社長と部長は、突然、笑顔を作ると大きな拍手を送った。

352ヤード、パー4の2番ミドルホールもほとんどストレートでリンダと社長にとっては、バーディーホールであった。1番ホールでバーディーを取ったリンダがビッグドライブをかつ飛ばすと、社長も負けじと渾身の力でドライバーを振った。部長は慎重に低いボールでフェアウエーを捉えた。志保は、40歳を過ぎて飛距離は落ちたもののドロボールで220ヤードほど飛距離を出した。部長は、緊張し始めたのかダフリが出始めた。5番アイアンをダフリ、寄せもトップしていつものトリプルを叩いた。

社長とリンダは、確実にバーディーを取り、順調な滑り出しに満足していた。志保も寄せワンでパーを拾い、まずまずの滑り出しにほっとした。部長は、いつものスコアで別に気にもしてない様子であった。489ヤード、パー5の3番ロングホールは、鬼門となるホールで、部長はここで大たたきしていた。社長もこのホールを苦手としていて、たまにダボを叩いていた。第二打から右ドッグレッグになっていて、ちょっと方向が狂うとOBになる危険なレイアウトとなっていた。

第一打がキーとなるホールのため、社長とリンダは、アイアンでティーショットした。志保は、5番ウッドで手堅くフェアウェーをキープした。部長も5番ウッドでティーショットしたが、左のラフに打ち込んでしまった。乱れ始めた部長を気遣い、社長は部長の第二打地点に同行した。少し深いラフからは飛距離が出ないと判断した社長は、9番アイアンでフェアウェーに出すようにアドバイスした。どうにかラフから脱出できた部長は、5番ウッドで第3打を打った。

部長は、いつものいやな流れになり、愚痴をこぼし始めた。「社長、またやってしまいましたよ。この調子じゃ、100は切れそうにありませんね」部長は、苦虫をつぶしたような顔で社長を見つめた。社長は、考え込んだ顔つきで答えた。「まあ、そう、気にするな。俺も、アイアンがいまひとつだ」社長は、3番アイアンでのティーショットで、リンダより20ヤードも遅れをとっていた。

部長は、怪訝な顔で訊ねた。「社長、どこがいまひとつですか。ティーショットは、あんなに飛んでいるじゃないですか。会心のあたりじゃないですか」社長は、腕組みをして、部長に話しても通じないと思ったが、一応話すことにした。「植木には分かるまいが、ティーショットは、芯をはずしていた。どうにか200ヤード飛んだのは、クラブのおかげだ。最近、アイアンの調子がよくない。困ったもんだ」社長は、あたりがくるった原因を自覚していた。50歳を過ぎてから関節が硬くなり、肩が思うように回らなくなっていた。

部長は、まったく理解できず、おべんちゃらを言った。「社長、私からすれば、うらやましいショットです。社長の思い過ごしじゃないですか。パーにバーディー、好調じゃないですか。この調子で行けば、70が切れるんじゃないですか。今日こそは、リンダに勝てるんじゃないですか」部長は、作った笑顔でお世辞を言った。おだてられた社長は、芯をはずしたのは自分の勘違いかもしれないと、ふと思い、リンダの股間から見えたピンクのショーツを思い出してしまった。「そうか、俺の勘違いだな。よし、今日は70をきるぞ。植木も、100をきるよ」つい時間を忘れていた二人は、社長の第二打地点にかけて行った。

社長は、5番ウッドで右の林越えに成功し、気をよくして、カートに戻った。リンダと社長は3オン、志保は4オン、部長は5オン、どうにか無事にグリーンに載せた部長は、大きく深呼吸をしてロングパットを寄せた。社長とリンダはパー、志保はボギー、部長はダボと鬼門をどうにか潜り抜けることができた。145ヤード、パー3の4番ホールは谷越えのショートホールで、部長は、何度もトップしては、ティーショットでボールを谷に落としていた。

「いやな、ホールですね。どうして谷越えになんかにするんですかね。嫌がらせとしか思えません。ゴルフはこれだから嫌いなんです」部長は、ぶつぶつ言いながら5番アイアンを手にしてアドレスに入った。硬くなった部長は、肩を十分にまわさず、相変わらず早打ちをしてしまった。若干ダフリ気味だったが、運よく谷を越えることはできた。社長とリンダはグリーンを捉え、志保は、バンカーにつかまってしまった。

志保にとっては、バンカーは問題なかった。むしろ得意であった。一発で低く出たボールは、ゆっくり転がり、ピン1ヤード手前で止まった。部長は、どうにか3オンできてほっとした。社長とリンダはパー、志保はボギー、部長はダボで、大たたきせずに済んだ部長は、胸をそっとなでおろした。やや左ドッグレッグの372ヤード、パー4の5番ホールは、社長とリンダにとってバーディーホールで、社長は気合を入れてドライバーを振りぬいた。

大きな声を上げた社長は、跪いてしまった。めったに引っ掛けることのない社長が、気合を入れすぎたのか、フックがかりそこなったのか、林の中に打ち込んでしまった。暫定球を宣言し、泣きそうな顔で再度ティーショットをした。カートに乗り込むとうなだれてしまった社長に部長が声をかけた。「社長、きっと見つかりますよ。私が探せばきっと見つかります。任せてください」社長は、たとえあったとしても、パーであがれないと思い、地獄に落ちたかのように青くなっていた。

5分探しても結局、社長のボールは見つからなかった。暫定球をしぶしぶ打って4オンできたが、結果はダボで60台の目標が消え始めていた。セカンドを9番アイアンでピン右3ヤードにナイスオンしたリンダは、見事バーディーを取った。429ヤード、パー4の6番ホールは、打ちおろしで、リンダは300ヤードほど飛距離を出していた。社長も260ヤードほど出るので、打ち上げのセカンドしだいでは、バーディーが狙えるホールだった。

だが、5番ホールショットの乱れが気にかかり、思い切って振れなくなってしまった。怖気づいてしまった社長は、気合を失い、左脚に力が入らず、どうにか240ヤードほど飛ばしてフェアウェーをキープした。飛ばない部長もこのホールだけは220ヤードも飛び、くるったように喜んだ。志保はステディーなスイングで部長の右横まで運んだ。社長は、部長の能天気な喜ぶ姿にあきれていたが、部長の後についてかけて行った。部長は、ボールのところにやってくると、即座に5番ウッドでアドレスしたが、社長は声をかけた。

「待て、少し左足上がりだ、短くもって、ゆっくり打て。打ち急ぐんじゃないぞ」社長のアドバイスを聞いた部長は、大きく頷き、深く深呼吸して、しっかり肩を回してスイングした。見事ジャストミートされたボールは、150ヤードほど飛んだ。「ナイスショットです、グリーン近くまで転がりましたね。社長のアドバイスのおかげです」部長は、社長に笑顔を向けた。気落ちしていた社長であったが、部長のナイスショットを見て、少しは気分が晴れた。

社長は、残り190ヤードほどを3番ユーティリティーでどうにかパーオンさせた。リンダは、難なく9番アイアンでピン左3ヤードにパーオン。志保も5番ウッドでグリーン20ヤード手前まで運んだ。グリーンまで40ヤードほどまでに転がっていたボールを、部長は慎重に両足をそろえ9番アイアンで軽く打った。見事グリーンにオンし、転がったボールはピン手前5ヤードに止まった。社長とリンダはパー、部長と志保はボギー、元気をなくしていた社長であったが、3番ユーティリティーでグリーンを捉えることができたことで、気分が落ち着いてきた。部長が社長に駆け寄り、社長の心中を察して、励ましとおべんちゃらを並べた。

「さすが社長。軽く打ってパーオンですね。社長のアドバイスも的を射ていますし、社長のおかげで100が切れそうです。頑張ります」部長の笑顔を見届けると、社長もほっとした笑顔でカートに乗り込んだ。今日もショットは絶好調だったが、スライスラインのバーディーパットをはずしたリンダは、不機嫌そうにパターをキャディーバッグに放り込んだ。

志保は、いつものようにパターのミスからショットがくるってしまわないようにリンダに声をかけた。「リンダ、そう、ムキになっちゃダメ。落ち着くのよ。カッとなったら負け。いいわね。パターは我慢よ。いい」リンダは、自分の短気がよく分かっていた。いつも、パターが入らなくなるとかっとなつて、ショットまでおかしくなっていた。リンダは、パターが苦手だった。いろんなパッティングを試してみたが、うまく行かなかった。

左ドッグレッグ、511ヤード、パー5の7番ホールは、リンダにとってはツーオンできるロングホールだった。リンダは、いつもフックをかけてショートカットを狙う。今回も見事ショートカットに成功し、残り190ヤードまで運んでいた。セカンドは、4番アイアンのフェードボールで見事ツーオンし、ピンハイ5ヤードのイーグルチャンスにつけた。社長は、堅実にパーオンし、ピン右7ヤードのバーディーチャンスにつけた。

部長はいつもの打ち急ぎが出て5ウツドのセカンドをダフリ、さらに、四打をバンカーに入れてしまい、やっと6オンした。志保は、ゆったりとしたスイングで5ウツドに7番アイアンで、見事ピン手前9ヤードのパーオンに成功した。リンダは、志保のアドバイスで気を取り戻し、冷静に下りのスライスラインを沈め、イーグル。社長もフックラインを見事沈めバーディー。部長は、得意のパットとあってラインを読まずあっさり打ったが、どうにかトリプルで上がった。志保は、見事、ツープットでパー。

部長は、なぜかパターが得意だった。部長は、直感的にパターの打ち方を発見していた。でも、社長に聞かれてもその秘訣は教えなかった。その秘訣とは、ボールの真横をヒットするのではなく、少し斜め上をこつんと叩くことだった。社長も、リンダも、ボールの真横を叩くため、緊張するとフェースがかぶっていた。ロングパットをいとも簡単に沈める部長に社長は、お願いするように尋ねた。

「部長は、パターだけはプロ並みじゃないか。いったい、どうしてそんなに力みもせずに打てるのかね。なにか秘訣があるんじゃないか。頼むから、教えてくれないか」社長は、部長のパターには一目置いていた。部長は、このときばかりは、心では天狗になっていた。でも、あくまでもまぐれに過ぎないといつもへりくだっていた。「秘訣だなんて、単なるまぐれですよ。私は、能天気だから、適当に打っているだけです。秘訣なんて、ありません」

パターだけは、社長に勝てる技術と思い、教えたくないと思っていた。

社長は、まぐれにしてはあまりにも上手なのできつと何か秘訣があるとにらんでいた。リンダも部長のパットには感心していた。どんなときも力まずに適当にこつんと叩くパットになぞめいたものを感じていた。「植木さん、本当にパットがお上手ですね。どんな練習をなされているんですか？もったいぶらずに教えてくださいよ。私は、パターの秘訣が分かれば、プロになれると思っているのです。見ていて分かるでしょ、私のパターの下手さが」リンダも部長からパターの秘訣を探ろうと下手に出て教えを願い出た。

部長は、リンダのパターの下手さを十分知っていた。緊張すると必ずフェイスがかぶっていた。しかも、イップスじゃないかと思うくらい緊張するのも分かっていた。「リンダさんは、考えすぎじゃないですか？私のように能天気にならばいいんじゃないですか？」リンダも緊張のあまり、ミスをすることは十二分に知っていたが、パターに入ると突然緊張するのだった。「植木さんは、まったく緊張しないのですか？潔いと言うか、思いっきりがいいと言うか、よくカツンと打てますね。私は、怖くて腫れ物に触るように打ってしまうのです。気が弱いのでしょうか？」

リンダは、すでにパター恐怖症にかかっていた。打つ前から入らないような気持ちになり、ストレートのラインでも震えていた。パターをまっすぐ引こうとするあまり、手が震え、なぜかインパクトでフェイスがかぶるのだった。「パターは性格が出ますからね～、リンダさんに能天気になれといっても無理ですね。肩の力を抜いて打ってみてはどうですか」部長は、ありふれたアドバイスをした。

165ヤード、パー3、8番ショートホールは、部長が大嫌いな池越えホール。120ヤード飛ばば池は越えられるので、そんなに恐れる距離ではないが、緊張するとトップしてしまうのだった。社長とリンダは、7番アイアンでナイスオン。志保のボールは、グリーン手前の花道に止まった。部長は、今まで何度もボールを池に打ち込んでいた。5ウッドを手にとると、震えながらアドレスに入った。このままだと池ポチャになると思った社長は、アドバイスすることにした。

「植木、深呼吸しろ、打ち急ぐな、ゆっくり大きくテークバックして、膝を使って打て」仕切り直しをした部長は、大きく深呼吸するとお尻を突き出して、ゆっくりテークバックした。気楽に振ったクラブは、ボールをカット気味に捉え、かろうじてグリーン右横に運んだ。「やりました、社長のおかげです」部長は、子供のような笑顔で社長に抱きついた。社長も嬉しくなったのか、部長を抱きしめジャンプした。

社長、リンダ、志保はパー。部長も寄せに成功しボギーに収めた。342ヤード、パー4、9番ミドルホールは、距離はないが、250ヤードあたりでフェアウエーが狭くなっていて、ティーグラウンドからは、フェアウエーが狭く見える。リンダは、280ヤードほどの飛距離で難なくフェアウエーをキープした。社長は、このホールを苦手としていて、時々フェアウエーバンカーにつかまっていた。今回もフェアウエーバンカーにつかまってしまった。

5番ウッドでティーショットした志保は、フェアウエーをキープした。部長も5番ウッドでティーショットしたが、大きくスライスして右のラフに打ち込んでしまった。ラフで3回ほど叩くのではないかと心配した社長は、部長の後について深い草に隠れたボールの位置まで走っていった。草の中に埋もれたボールを見て社長は、アドバイスをした。「9番アイアンで思いっきり上から叩け。10ヤード飛ばせば成功だ。こっちのフェアウエーに目がけて打てよ」

部長は、渾身の力で上から叩き込んだ。ボールは、どうにか5ヤードほど飛んでフェアウエーに出た。ほっとした部長は、5番ウッドで第三打を打った。5オンの部長だったが、トリプルで上がったことにほっとした。リンダはバーディー。社長と志保はボギー。フロント9を終え、部長は重労働から解放されたかのように大きく肩で深呼吸した。社長のスコアは、まずまずだったが、アイアンの感覚がいまひとつだった。

昼食の反省会

四人はレストランの窓際の席に腰掛けると部長はカレーを、社長と志保はコーヒーを、リンダはオレンジジュースを注文した。さっそく、社長は、笑顔を作ると正面に腰掛けていたリンダに話しかけた。「さすが、リンダさん、5アンダーですね。今日は、10アンダーまでいけそうじゃないですか」リンダは、褒められて嬉しかったが、簡単なパットを外す自分に落ち込んでいた。「ダメなんです、本当に、パターがダメなんです。どうしたらパター恐怖症が治るのでしょうか？」

リンダにとっては、このコースはやさしかった。ショットだけを見れば、プロでもトップクラスに入れるほどの技術と飛距離を持っていた。だが、パター恐怖症が突然現れると、スイングリズムまで悪くしてしまっていた。社長の右横で頷いていた部長にリンダは声をかけた。「植木さんは、パターで緊張しないのですか？何かおまじないでもあるのですか？」部長は、笑顔を作り答えた。

「おまじないなんてありませんよ。能天気なだけです。僕のようにヘボは、スコアのことを考えないから、適当に打てるのです。おそらく、バーディーパットだったら、僕も緊張するんじゃないですか。パターは、技術というより、気持ちじゃないですか？リンダさんも、開き直って打ってみてはいかがですか？無責任なアドバイスですが」リンダは、深刻な表情で聞き入っていた。

「開き直ってですか？それができないのです。気が弱いと言うか、臆病者と言うか、いざとなると怖気づいて、手が震えてしまうのです。病気みたいなものです。こんな有様では、プロにはなれません。もう、プロはあきらめています」社長は、リンダの意外な発言に目を丸くした。「リンダさん、そう深刻にならずに、誰でも、スランプはありますよ。ある日突然、手が動くようになるなんてことは、よく聞きます。まあ、そう、あせらっずに、チャレンジしてみてください」社長は、リンダを慰めた。

リンダは、うつむいていたが、志保が笑顔で社長に話しかけた。「社長のスイングは、ベンホーガンに似ていますね。とても、アイアンの切れがいいです。この調子で、バーディーをとってください」社長は、ベンホーガンに似ているといわれ嬉しくなった。社長は、若いころから、ベンホーガンにあこがれていて、動画を見てはスイングを真似ていた。特にアイアンのフェードにあこがれていた。

「そうですか。似ていますか。志保さんは、見る目がおありです。私は、ベンホーガンの真似を若いころからやっているんです。ベンホーガンにあこがれているんです」社長は、笑顔で志保に顔を向けた。志保は、適当に褒めたのであったが、本当に社長がベンホーガンにあこがれていることを知り、さらに褒めることにした。「アイアンのフェードは、最高です。あんなフェードは、リンダでも打てません。何か秘訣もおありですか？」社長は、褒められ有頂天になっていた。

「いや、秘訣と言うか、なんと言うか、私は、とても右肩がやわらかいくて、右腕が人より長くなるのです。だから、フェードが打ちやすいのです。たった一つのとりえです。でも、最近は、もうダメです。飛距離が落ちました。肩も腰も痛いし、筋肉は硬くなって、思ったようなスイングができません。私のゴルフも、もうおしまいです。若いリンダさんが、うらやましいです」社長は、53歳のとき五十肩になり、それ以後、関節が思うように動かなくなってしまった。

心配そうな表情になった志保は、励ましの言葉を述べた。「いや～、社長は、お若いですわ。まだまだ、これからじゃないですか。ゴルフに年は関係ありません。多少飛距離が落ちても、アイアンの技術でスコアは維持できます。社長の足腰は、まだ、30代じゃないですか。日本アマ目指して、頑張ってください」志保は、リンダを励ましてくれたお返しに、目いっぱいのおべんちゃらを述べた。

社長は、30代の足腰と褒められ、その気になってしまった。「そう思われますか。最近、左脚が衰えて、左腰の切れが悪くなったように思っていました。年はとつても、日々精進すれば、飛距離が落ちても、アイアンで勝負できますかね。日本アマか。ゴルファーの夢ですよ」社長は、20代のころ日本アマに出場するのが夢だった。惜しいところで、出場できなかったが、心の底では、今でも出場したいと思っていた。

部長は、このときを逃してはならずと、即座におべんちゃらを述べた。「社長なら、やれます。日本アマ目指して頑張ってください。社長のスイングは最高です。私も応援します」部長は、笑顔を作り、志保に同意を求めるように頷いた。志保も大きく頷いた。社長は、脚の衰えを気にしていたが、志保と部長におだてられると、本気になってしまった。「そうか、植木もそう思うか。よし、日本アマ目指して、一から鍛えなおすか。足腰しだいでは、夢じゃない。よし」社長の目は、輝いていた。

うつむいていたリンダであったが、目を輝かせた社長に拍手を送った。「頑張ってください。私も応援します。私は、教師になろうと思っています。プロにはなれなくても、子供たちに教えることはできそうです。ジュニアの育成に頑張ってみます」社長は、リンダの夢に頷いた。「そうですか。先生にね。それもいいことです。人それぞれ個性があります。リンダさん、先生になって、世界に羽ばたくゴルファーを育成してください」

浮かない表情の志保に気付いた社長は、志保のドロボールを褒めることにした。「志保さんのドロは、飛距離が出てますね。いつごろから手打ちをされているのですか？」志保は、突然の質問に戸惑ったが、手打ちのドロは自慢だった。「あら、社長、そんなに飛距離が出てますか？40歳のころから手打ちを始めましたの。シャフトがいいので飛距離が出てるんだわ。最近のシャフトは、よくしなるじゃないですか。トップでしなりを作り、一気に振り下ろすと、しなりの戻りでパンチが効くみたいです」社長は、腕を組み、頷いていた。

「なるほど、確かにシャフトは進化しています。私のシャフトも優れものです。7番アイアンで170ヤードも飛ぶんです。シャフトが飛距離を出すんですね。年をとってもこのような飛距離を出してくれるシャフトがあれば、十分若い者と戦えます。今日もシャフトにかなり助けられています。シャフトに合ったスイングをすれば、まだまだ、いいスコアが出そうです。やる気が出てきました」社長は、シャフトのおかげで飛距離が伸びたことに感謝していた。

バック9

四人は、パターの練習を5分ほどやると、10番ホールに向かった。478ヤード、パー5、10番ホールは、緩やかなうちおろしで、リンダはツーオン狙いのホールだった。部長はティーショットをチョロしてさらに第三打を右のバンカーに打ち込んでしまった。やっと、5オンしたものの3パットでトリプルを叩いてしまった。リンダは、セカンドを3番アイアンで見事ツーオンに成功した。社長と志保は、着実にパーオンした。リンダは、バーディー、志保と社長は、パー。

396ヤード、パー4、11番ミドルホールは、打ちおろしで飛距離が稼げるホールだったが、まとも、部長は緊張したのか、テンプラを打ってしまった。リズムを失った部長を気遣い、社長はセカンド地点でアドバイスをすることにした。「植木、落ち着け、いつもの早打ちが出てるぞ。肩を顎まで回して、切り返せ。ダウンスイングは左脚からだ。いいな」部長は、大きく頷き、アドレスに入った。

落ち着きを取り戻した部長は、右足体重で見事なドローボールを打った。「おい、ドローじゃないか。今日イチのショットだ。この調子だ」部長は、初めて打ったドローに目を大きくして笑顔を作った。「どうやって打ったのですか？自分でも分かりません。初めてです。こんな見事なドロー」部長は、自分のドローを褒めてしまった。社長は、噴出しそうだったが、部長の肩をポンと叩き、励ましの言葉をつけ加えた。「やればできると言うことだ。インサイドからヘッドが入ればドローになる。今の要領を忘れるな」部長は、褒められたが、どうやって打ったかまったく憶えていなかった。

部長は、3オンだったが、見事、得意のピン右4ヤードのパーパットを沈めた。志保は、3オン2パットのボギー。社長とリンダは、パー。326ヤード、パー4、12番ミドルホールは、部長でもパーオンできる打ちおろしのホール。部長は、気をよくし落ち着いて220ヤードのナイスショット。残り100ヤードほどを9番アイアンで見事パーオンした。全員パーパーパットを沈めたが、リンダは、バーディーパットを外したことに落ち込んでしまった。

肩を落としたリンダを励まそうと部長は、リンダに声をかけた。「リンダさん、パターをまっすぐ引こうとして、手が硬くなっていませんか？僕は、まっすぐ引かないんです。少し上に引き上げて、斜め上からこつんと叩くんです。参考になりますか？」リンダは、ポカンとしていた。

「え、まっすぐ横に引かずに斜め上に引き上げて、そして、上から打つんですね。そんなうち方、初めて聞きました。私たち、みんな、真横に引いてまっすぐ打っています。試してみます」リンダは、初めての打ち方に興奮していた。

147ヤード、パー3、13番ショートホール池越えの打ちおろしのため、クラブ選択と距離感が難しい。部長は、池を避けるように最も短い距離を狙って、右サイドのバンカーを目標に打っていた。志保もバンカー目がけて8番アイアンを軽く振った。いつものようにバンカー手前にボールは落下した。部長も8番アイアンでバンカー目がけて打ったが、フックがかかり、もう少しで池ポチャになるところだった。リンダと社長は、9番アイアンで見事パーオン。

ピン左5ヤードのリンダのラインは、ややスライスラインであったが、部長から先程聞いた上に引いて上から叩くやり方を試してみた。ほんの少しカップを舐めて右に外したが、楽にパットできたことに驚いた。「植木さん、楽に打てました。手も震えませんでした。これから、このうち方をやってみます」部長は、リンダの笑顔を見てなんだか嬉しくなった。「お役に立ちましたか。よかった」リンダは、新しい自分を見つけたような気分になり、ボールを拾い上げるとガッツポーズをとった。リンダと社長はパー。部長と志保は、ボギー。

347ヤード、パー4、14番ミドルホールは、打ち上げのため、セカンドで左脚上がりのライで部長は、よくダフっていた。部長は、残り170ヤードほどあったが、ダフってはいけないと思い、9番アイアンで楽に振った。セカンドはダフらなかったが、第三打をダフってしまった。4オン、2パットでいつものようにダボ。志保もここの左脚上がりのライが苦手で、残り160ヤードほどあったが、9番アイアンで刻んだ。志保は無事3オンした。リンダと社長はパー。志保はボギー。部長はダボ。

部長は、緊張すると簡単なアプローチでダフっていた。なぜか右肩を下げる癖があり、なかなかこの癖が治らなかった。「植木、また右肩が落ちてるぞ。両足をそろえてやわらかく膝を動かして肩と腕を一体化させて打て」社長は、部長の前でアプローチの打ち方をやって見せた。部長は、社長のまねをして、膝を使ってゆっくり振ってみた。「そうだ、あせらず、膝をやわらかく使って打てばいい」部長は、もう一度アプローチの練習をして、頷いた。

407ヤード、パー4、15番ミドルホールは、打ちおろしでフェアウェーが広く意外と気楽に打てるホールになっている。多少左右に曲がってもOBになりにくいので部長も思い切って打っていた。リンダは、豪快な300ヤードのビッグドライブを放った。社長は、いつもは堅実にフェードを打っていたが、今回は、志保の真似をしてドロウを打つことにした。ダウンスイングで正面を向いたとき、左半身を止めてヘッドを走らせるのがコツだった。

テークバックでは、左足かかとをほんの少しあげ、スピードをつけてしっかり肩を回し、一気にダウンスイングに入った。インパクトからフォロースルーにかけて腰も肩も回転させず、クラブヘッドだけを走らせた。見事ドロウがかかったボールは、30ヤードほどのランが出て、270ヤードほどの地点まで到達した。社長は、こんなに飛距離の出た手打ちに驚いた。「やってみるものだな〜」社長は、思わずつぶやいた。

拍手を送った志保が、思わず声をかけた。「社長、最高の手打ちですわ。私よりはるかに左腰と左肩にブレーキが効いて、ヘッドが走っていました。さすが、社長です」社長は、時々、アコーディアの練習場でこっそり、手打ちを練習していた。50を過ぎ飛距離が落ちてきたのを実感し、飛距離の出るドロウボールを打つ練習をしていた。手打ちの打ち方は知っていたのだが、左に引っ掛けるのが怖くて、なかなか、コースでは打てなかった。

今の手打ちの成功を実感し、これからはティーショットでは、手打ちのドロワーを打ってみることにした。うまく打てるようになれば、アイアンでも試すことにした。部長も多少スライスしたが、フェアウエーをキープした。社長は、セカンドでも手打ちをやることにした。グリーンまで残り130ヤードを9番アイアンでボールだけ打つ感じでシャープに振ってみた。ライがよかったのか、ジャストミートしてグリーンで止まった。

社長は、練習すれば、アイアンも手打ちができそうな気持ちになった。いつもは、左手を回転させないフェードでグリーンを狙っていたが、手打ちでもグリーンでボールが止まるのが分かり、しばらく使い分けてみることにした。グリーンに上がった社長に志保が声をかけた。「アイアンでの手打ちも切れがあって最高でした。今日は、いいスコアが出そうですね」社長は、頷いただけだったが、手打ちの成功に心で笑顔を作っていた。社長とリンダは、パー、志保はボギー、部長はまたもや寄せをダフリ、ダボ。

549ヤード、パー5、16番ロングホールは、左ドッグレッグでセカンドが山越えと言う最もミスしやすいホールとなっていた。部長は、8とか9を叩いていた。部長の最もにがてとするホールだった。社長もリンダも飛距離を考えて、アイアンでティーショットしていた。だが今回は、社長は手打ちのドロワーを試してみることにした。かなり難しいショットであったが、勇気を出してチャレンジすることにした。OBを出せば、スコアが悪くなるが、手打ちの上達には失敗も必要だと考えた。

リンダは、ティーショットを5アイアンでセカンドが打ちやすい右サイドに打った。社長は、手打ちのイメージをして、クローズスタンスでフックを打つことにした。一気に振り下ろしたクラブは、ジャストミートしたが、フックがかかりすぎて、左の林に打ち込んでしまった。ボールを眺めていた部長が、ア〜と悲鳴を上げた。リンダと志保は、呆然とボールの行方を眺めていた。社長は、頷き、失敗をじっと受け止めた。

打ち直すと気持ちを切り替えセカンドに向かった。危険なフックは博打のようなものであったが、手打ちをする限り、ミスを恐れては進歩がないと自分に言い聞かせていた。リンダは、セカンドも5アイアンで林越えを避けた。社長と部長は5オン、志保は4オン、リンダはパーオン。社長のチャレンジに触発されたのか、リンダは8ヤードのフックラインのバーディーパットを強めに打った。見事、カップの縁に当てカップインさせた。リンダも博打のようなパットだったが、偶然カップインしたことに、自然に笑顔がこぼれた。

社長と部長はダボ。志保はボギー。リンダはバーディー。部長は大たたきせずにすんだことでほっとしていた。163ヤード、パー3のショートホールは、打ちおろしでミスの少ないホールだった。リンダは、7番で少しシャット気味に低めのボールを打った。志保は、6番アイアンでフルスイングした。社長は、7番アイアンでいつものフェードを打った。部長は、5番ウッドでゆっくり振ったが、右のバンカーに打ち込んでしまった。

部長は、このバンカーで3回も打ったことがあり、バンカーに入ったのを確認して青くなってしまった。部長のバンカーは、右手で叩こうと力んでしまって、いつもダフっていた。社長は、バンカーの打ち方をアドバイスすることにした。部長より先にバンカーに行くと、縁から30センチほどにある目玉のボールをじっと見つめていた。後からやって来た部長は、目玉のボールを見て悲鳴を上げた。

「ウヘ～、一生出ませんよ。社長、どうしましょ」社長もこれは大変なことになったと腕組みをした。社長は、フェースをシャットにして打ち込ませることにした。「いいか、フェースをかぶせて、思いっきり上からたたけ。すくい上げるなよ。ボール目がけて上から叩くだけだ。ドスンとぶち込め」部長は、一度フェースを社長に見せ、社長が頷くと、思いっきりボールめがけて真上から打ち込んだ。ドスンと音がすると、飛び出したボールは、バンカーの縁から20センチほどに止まった。

部長は、歓声を上げた。「社長、やりました。一発で出ましたよ」バンカーから飛び出してきた部長は、社長に抱きついた。「おい、やることあるだろ～」部長は、われに帰りレーキを手に取ると砂をきれいにならした。3オンできた部長は、ダボで胸をなでおろした。リンダと社長はパー。志保はボギー。347ヤード、パー4の最終ホールにやって来た部長は、やっと地獄から解放されるようで、空元気を出した。「よし、このホールはパーを取るぞ」部長は、素振りを始めた。

。

部長は、今日イチのショットをしようとアドレスに入った。部長は、社長の手打ちを真似ることにしていた。ドロワーを打って230ヤード飛ばす気持ちでテークバックに入ると、一気に振り下ろし右足体重で左腰をとめて、右方向に振りぬいた。うまく左ひじが折れて、ヘッドがビュンと走った。右に向かったボールは、フックがかかり左に戻ってきた。社長の打ち方とは違ってしたが、インサイドアウトにハードヒットできたため、飛距離が出ていた。

リンダが部長の初めての男らしいフックボールに歓声を上げた。リンダは、部長は非力で筋力のない男性と思っていたからだ。「ヒヤ～、植木さん、かなり飛んでますよ。すごいじゃないですか、さすが男ですね。力ありますね」部長も自分の初めて打ったフックボールに驚いていた。バシッと言う力強い手ごたえは、初めてであった。社長も驚いて声をかけた。「植木、結構、力あるんだな～。今日イチじゃないか」腕組みをすると大きく頷いた。志保も拍手を送った。「植木さん、やっぱり、男ですね。惚れ惚れするフックでした」部長は、みんなに褒められ、照れ笑いをしてさっさと歩き出した。

部長は、まぐれのフックであったが、子供のようにはしゃいでセカンド地点にかけて行った。グリーンまで残り110ヤードほどを9番で打つと、フックのかかったボールはグリーンを勢いよく転がり、グリーン奥のバンカーに落ちてしまった。今度は目玉ではなかったが、またもやダフッてしまい2回でやっとバンカーを脱出できた。リンダと社長と志保はパー。部長はダボ。ホールアウトした四人は、笑顔でレストランに向かった。